平氣物語卷第四

W 77
H 51
4
貴重書

國立故宮博物院藏書

平家物語巻第四

源兼平兵月一日の八島

を出て法皇と松ケ枝

元日元三の間参内

そ後許納言通信両の子

中納言教つ手束弓

くかりそめ出ぬ

月廿日の八東宮四位侍従

詰陣(めづ)あまたありまして先(せん)例(れい)よりは午(ご)刻(ぜん)過(すぎ)に
あつまりしかば清涼殿(せいりやうでん)の西(にし)の庇(ひさし)に
その中将(ちうじやう)けさうの陣(たち)をたてさせ
給(たま)ふ御(ご)方(かた)の幕(まん)あり御(ご)方(かた)の幕(まん)
かうぢんをたてさせ給(たま)ふ御(ご)方(かた)の幕(まん)
ひだりそへ給(たま)ふ

ゆう物ん
生年十六
ろう成まつけ
ごろ朝一一ゆ
ゆりそ高ゆ
ちち陸ろ
くそ
だり
巣へ
ひ
ゆ新ゝ
ゆ
ゆ
ゆ

之
北条重時
名越朝時
執権
新三位中将時氏
相模守
平九郎左衛門尉
時忠
内
三浦
左衛門尉
泰村
同
弟
左近将監
光村
同
弟
左近将監
家村
同
弟
左近将監
資村
同
弟
左近将監
景村
同
弟
左近将監
盛村
同
弟
左近将監
義村
同
弟
左近将監
家氏
同
弟
左近将監
重村
同
弟
左近将監
氏村
同
弟
左近将監
村資
同
弟
左近将監
村重
同
弟
左近将監
村氏
同
弟
左近将監
村連
同
弟
左近将監
村信
同
弟
左近将監
村綱
同
弟
左近将監
村広
同
弟
左近将監
村泰
同
弟
左近将監
村時
同
弟
左近将監
村行
同
弟
左近将監
村長
同
弟
左近将監
村国
同
弟
左近将監
村国
三浦
左衛門尉
泰村

風晋祿帝二風我朝
三風六条院二風ともれ
のまゝ
つゝまれ給ふ後ハ権
武八幡ハ改名
そ朝
漢の高皇帝
て百日と
ふ跡和漢之
事も
院
祖の
ハ
ども
ども
ども

小陰宮のよ
うくはそうろうけ
出家のく
ども、惟、言の宣旨
を承、保護
院の御
願三月上旬
國歌所
そうの帝王
の帝幸

掌と
くもれる
空も
雪と
山門の
御掌の
右も
左も
の
ふ
ふ
ふ

梅の花を折りて老たる者の前に置
八条屋より立て使を以て諸侯の列に
連なり乱髪と美髯と相対して
酒宴の興を催す
道人

今城(きのう)の荒(あら)れ法(ほう)の中(なか)の乱(みだ)れ言(こと)
多(おお)く法(ほう)の師(し)の寝(ね)殿(でん)の階(きざはし)
御(ご)輿(よ)(こし)寄(よ)せて八(や)条(じょう)の院(いん)
八(や)条(じょう)の院(いん)は花(はな)盛(さか)りの
ころ思(おも)ひ出(いで)ありて新(あらた)
春(はる)門(もん)院(いん)
多(おお)く法(ほう)の師(し)
故(こ)女(にょ)院(いん)の御事(おんこと)

こもりいて　御衣を取りの
西院の御所　御門閉ざし
御門閉ざし　とくもりらん
戸も　あけもせず
物語もせず　こもりいて
明日　ここを立ち
よろぼいまでに　上皇法皇
故郷の都に　帰り入る

人丸感涙と
とゝまりて
なをもゝ
ゝ
ゝ

神主の重度加階従
司藤原有憑臣等の殿上
だゞのにこたび改入
名永野
乃鳥
還幸
毎

ゑ池の中納言物語の屋の
まきもくさ七日和多
嶋守の陰寺の大納言勅
ゐ道相國の
ゐ宿とこ
ゐ
ゐ
ゐ

よりて公家武家の人々悉く
つゝしみ敬ひ給ふ事なれども
公家の御事和国の西八
御門の御事にして
新帝の御時八萬代の
御事なるべし
其の御門の御后
大殿と申して
其の御腹の御姫君
御年十三にて

そのところ
手嗜(たしなみ)の為(ため)、九条殿(くじょうでん)より之場(これば)へ
御(ご)入(にゅう)の節(せつ)、大相殿(だいしょうでん)の
まゐらるゝを、御(ご)前(ぜん)へ
御(ご)呼(よび)出(だし)ありて、
御(ご)対面(たいめん)ありし
ゆへ、其(その)儘(まま)御(ご)供(とも)
ありて、
御(ご)屋敷(やしき)へ
御(ご)入(にゅう)
御(ご)跡(あと)より
大相殿(だいしょうでん)
御(ご)入(にゅう)
御(ご)対面(たいめん)
ありて、
御(ご)帰(かえ)りの
節(せつ)、
御(ご)玄関(げんかん)まで
御(ご)送(おく)り
申(もう)し
上(あ)げ
奉(たてまつ)り
候(そうろう)
処(ところ)、
九条殿(くじょうでん)
御(ご)家来(けらい)
衆(しゅ)
御(ご)玄関(げんかん)
へ

行幸あるべき例なり。火もうもう故也。
ゆくりなく三条の宮の延久の
儀例よりはじめて、
うるはしき物の
九条殿の
その中ごろ、
名をもひたたれ
ひきかけ

第七段

さてまた世間の人々
つぶ院の皇子たちの
四方の里
三里高
舎の高

年三月十二日等十日
仁和寺なる

故、全判官義経の主従十余騎
そがまま
行歩を
諸類の内
不当
二郎朝宗
大高判官秀貞手勢の
大高河内四郎成
入道義英全子息石河判

やまとのくに
大和國より
うの
宇野七郎親治
こぞ
去年
ありはる
有春
きくこと
聞事
ありはる
有春
ようろう
養老
みつ
三年
ありはる
有春
ようろう
養老
みつ
三年
ありはる
有春
ようろう
養老
みつ
三年

子太高重行甲斐國
都義清ヲ討ツ甲斐
信義ノ嫡子太高ヲ
信義ノ舅見ニ高ヲ
長清一条忠頼板垣三
忠信ヲ生ム忠信
光安国ヲ有義
ス高維義忠信カ
冠者盛義ヲ討ツ
親義手負ノ父ヲ
義ヲ子ノ中高ヲ
冠者盛義ヲ討ツ
親義手負ノ父ヲ
義ヲ子ノ中高ヲ

先生義方ノ當家ヲ
仆ノ玄國ヲ
冠著正義ヲ
義宗ノ高義ヲ
國ヲ故ニ
着義遜ル
田新発

ノ流ヲ汲ム
太ニ高先生
ノ法物朝
義教化ヲ
義同ニ
高義玄陸奥
高冠
高名
朝敵ヲ

菊亭左大臣殿
天下の事奥令申候
次第深三位令申候
間万事ハ大納言
殿へ御談合
可被成候
恐惶謹言
　　秀吉
　　花押
十月廿日
　　秀次
　　花押

きて今宵(こよひ)は在東國(ざいとうごく)に
同(おな)じ月(つき)を見(み)ることよと申(まう)され
ければ義家(よしいへ)の尾張(をはり)の源氏(げんじ)大(おほ)に悦(よろこ)び
ありて狂歌(きやうか)五月十日(さつきとをか)同作(どうさく)の
ごとく詠(よ)み給(たま)ふ(これ)人(ひと)和歌(わか)の
ちからにて神(かみ)も哀(あはれ)と思(おも)ひ給(たま)ふ
なり今宵(こよひ)の月(つき)を見(み)給(たま)ふ
ことよりこれ和歌(わか)の
生(いき)義教(よしのり)
陸國信(くにしの)

有義仲、行家の追討の為に、北陸道へ下向し給ふと聞えしかば、平家の方にも、小松の三位中将維盛、越前の三位通盛、薩摩の守忠度、淡路の守清房、侍大将には、上総の守忠清、飛騨の守景高、其の勢十万余騎にて、既に加賀の国へ発向す。

義仲も、五万余騎にて、越中の国倶利伽羅の麓に陣を取り、源平両陣の間、僅に十町を隔てたり。

平家の方には、火を以て夜昼の分ちとなし、源氏の方には、鬨の声を以て、夜昼の分ちとなす。

されば、源氏の方には、夜討をも懸けず、平家の方には、夜討をも懸けんと、用心をなす事、なのめならず。

斯くて、源氏の方より、夜討を懸けんとて、

今宵とて
あけの御供と
そなえ宵
宮の拍子
やしろ
やひろ
ひょうし
やしろ
やひろ
ひょうし
やしろ
やひろ
ひょうし

げつかんにせんよにん
月官二千餘人
つづ
續
やあ
矢合
げんじ
源氏
き
木
ふね
舟
ひ
引
ゆ
湯
ふる
古
ふね
舟
ふる
古
ふね
舟
ふる
古
ふね
舟

高舎面の小門をうろうろ
宅光長判官高泡赤判
五日の朝公事三百餘騎
うう押寄の子の刻ばかり
ふり判官光長八馬

てんぐさうやうとらもち
いろもうすべくあらまほ
きのそやかに
様(やう)れ馬(ま)
いろもうすべく
いてさうらはば
左(さ)衛門(ゑもん)督(のかみ)殿(どの)

まいりそうろうをけそうろうまでもそうろうれ

ごぜ　ごーと
ぜんごとこうもそうろうて
ごぜ　ごーと
ぜんごとこうもそうろうて

ば　ば
場ふそうろうて

のぶ　のぶ
信連つれそうろうて

たうたう　たうたう
とうとう相国入道

きやう　きやう
京

のぶ　のぶ
信連つれそうろうて

たうたう　たうたう
とうとう相国入道

きやう　きやう
京

ば　ば
場ふそうろうて

ごぜ　ごーと
ぜんごとこうもそうろうて

ごぜ　ごーと
ぜんごとこうもそうろうて

まいりそうろうをけそうろうまでもそうろうれ

まいりそうろうをけそうろうまでもそうろうれ

くん道相國うち打つゝむ物春
のひ外のうらみもけつ
なそ東國へそうり梅屋
つゝて末の相元つゝ宮
ねうの錦舎殿北
て林のとの國井田うり
そ一家八高倉と小
堅志河とまそもそ

ほのぼのとみえし九重（ここのえ）の
内（うち）より馬（げ）もたてまつる馬（むま）のうしろに
のりけるは
その名（な）をば公（きみ）ひとまろ
ほうだつ将軍（しょうぐん）
とぞ申（もう）しける
そのうしろにひつ馬（ば）
ひきそひてまいりけり
ほどなく仲（なかる）の
御門（みかど）
そのうしろにひつ馬（ば）と
ぢのこ
ぼたん寺（でら）の
めしの馬（むま）
かいだ
名馬（めいば）
ろろろ

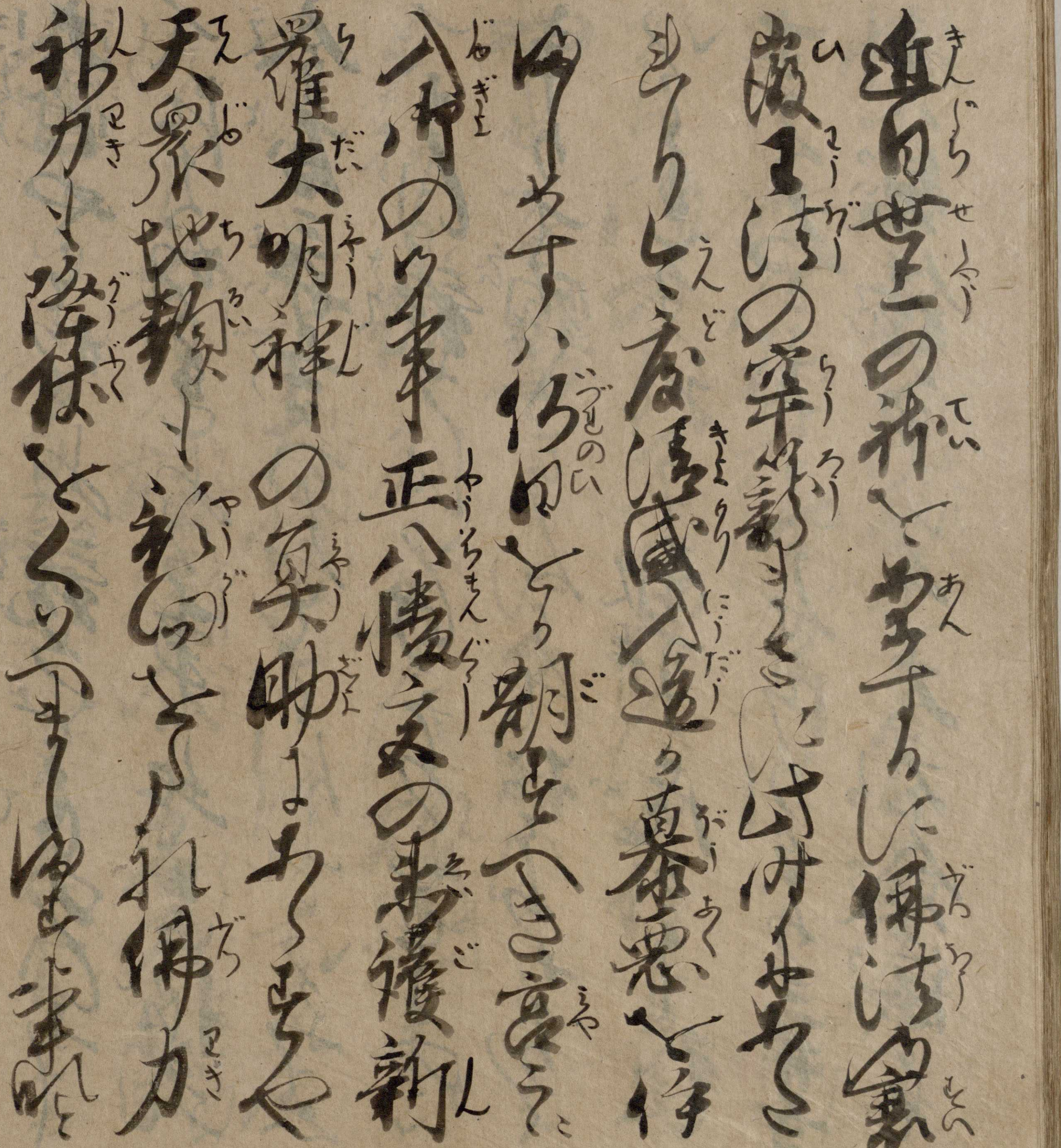
くらまでら
きそくいちにち
ろくじゅうごど
ごしちはちど
まいり
ける
ひとの
いはく
ここの
くらまでら
は
むかし
ぜんにんの
ひじりの
すみ
たまひ
しところ
なり
と
いひつたへ
ぬ
ふるき
ためし
ども
ありて
いと
たふとき
ところ
なり
ふもとに
ある
ほこらの
うまや
は
むかし
ぜんにんの
ひじりの
うまを
つなぎ

前の歌とうらを
見て
ひとつのうらの
宗鑑の歌
馬やるふみ
のあまりて主の
ふくろにや
きふせまして仲間と

と若大将（わかだいしょう）と
八三位入道の
の許へまいり
事こまごま
さぶらひ
仰せ聞（きこ）
おそれ
申（もう）し
小四郎（こしろう）
敵（かたき）

かり（この心も）ゐ馬と（ゐ）
三位（にーだう）の通殿（とおのとの）の
ひとまもり
ミーも
書為（かきな）れ
井手（ゐで）へ（ゐ）
井手（ゐで）へ出（いで）
たりし
ゐ（ゐ）
ゐ（ゐ）
ゐ（ゐ）

だいしゃう
大将やとて
入たゝかふ
いで
今ハ是非に
きゝて
きゝて頸
うつ事
なんぞの
ありあもせ
なきに
うそを
つきて
ありあふ
ものに
ハ
おもひ
かけ
なく
うそを
つき
て
あハ
れ
南
ていの
庵
うち
に
ハ
ありあふ三井寺
くわい
貝
鐘
かね
を
つゞけ
ざま
に
撞
つき
て
大



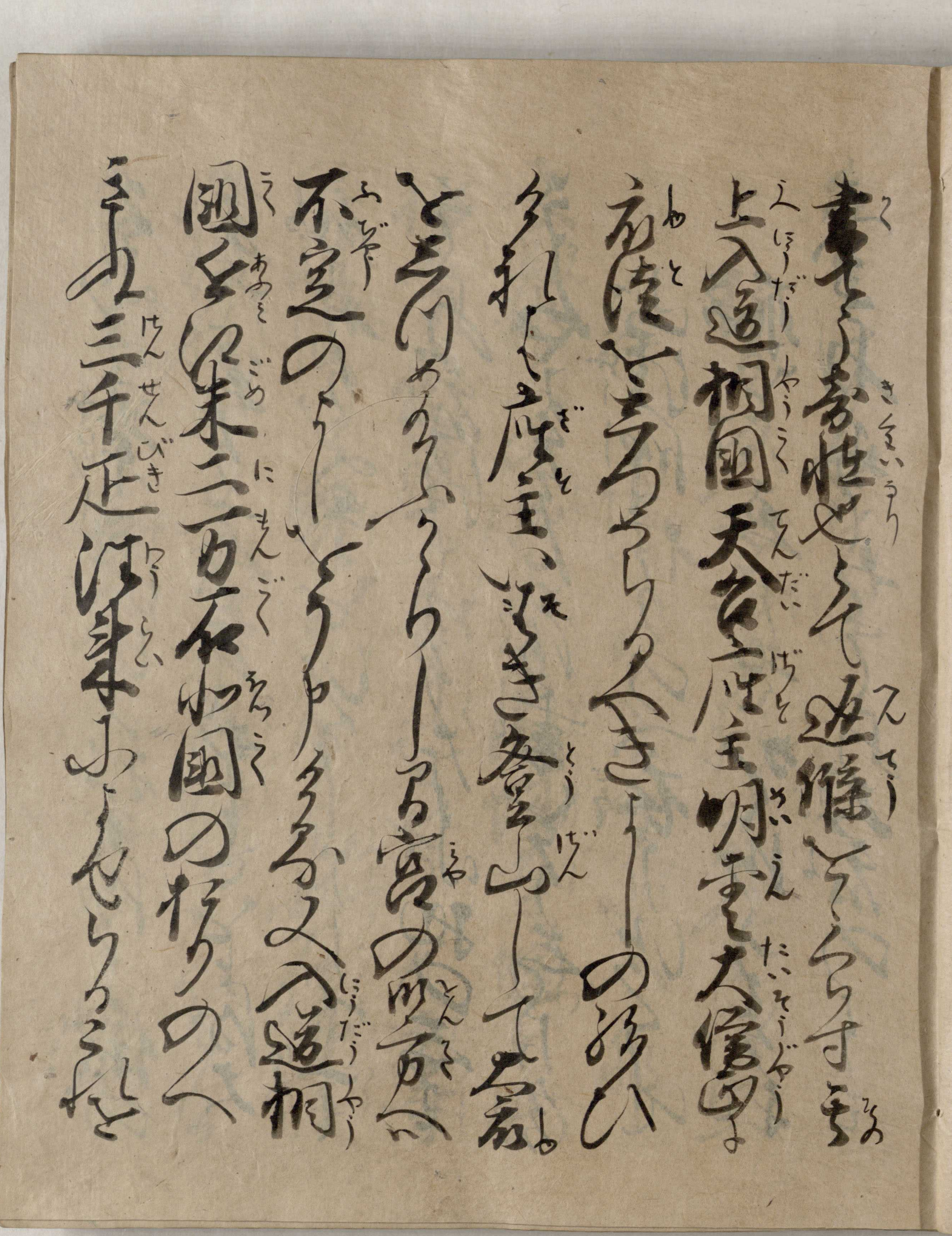
うつくしき
ひやうえ南都八
條美の
まゝ一味
春色
同伴
御
門へ
の
御殿を
会方とて
濱ゆふ

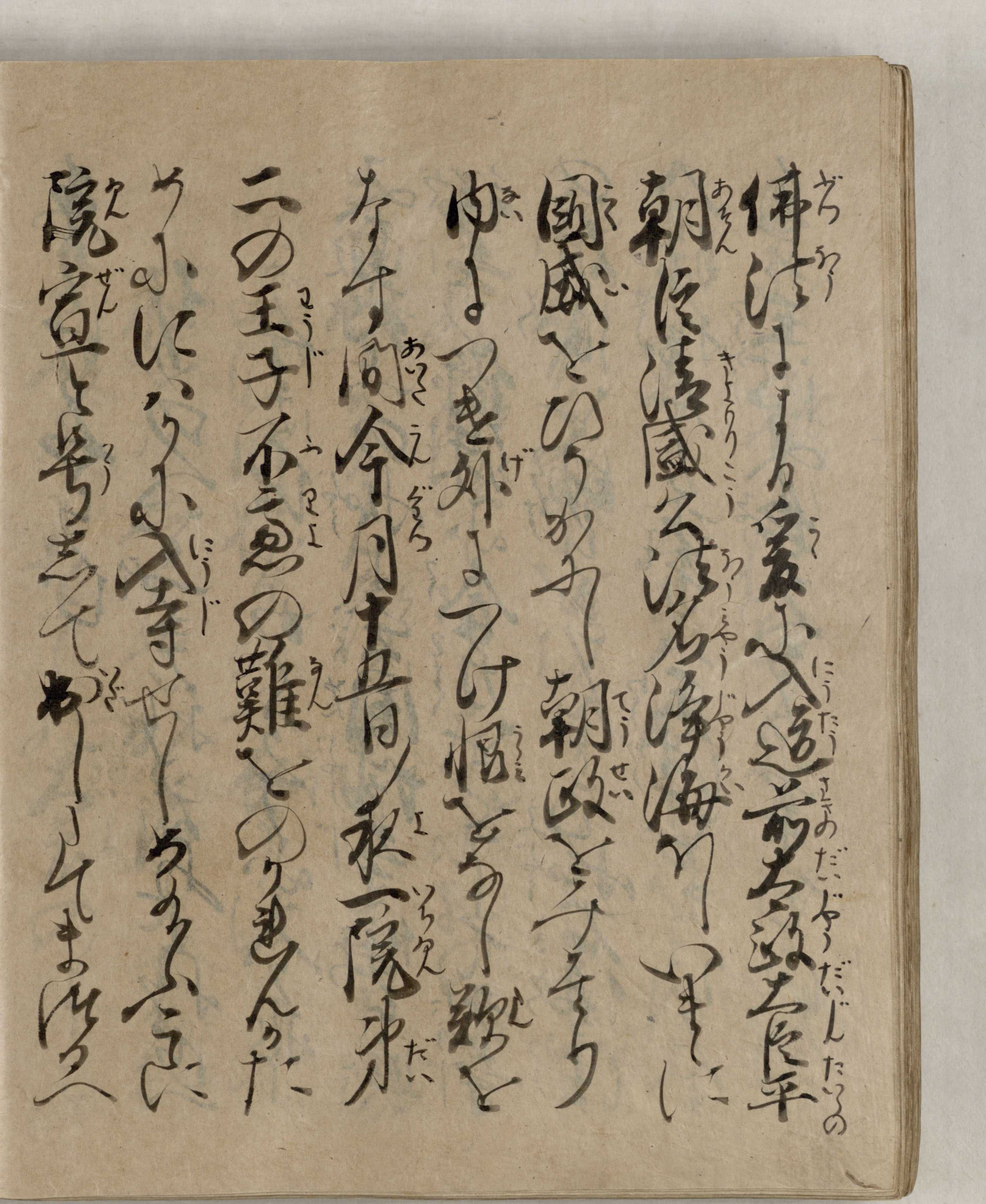
まみよ時よりそまり
給欲しくとんや申して
雪寄門延暦寺
ぜきさろ
ふつ山加茂
れ毛園
えどんろう
ろうそ
とへ鳥の
さろう
名の
けり
ろうそ
の処
ぢさ
ろうそ
ろうそ
ろうそ

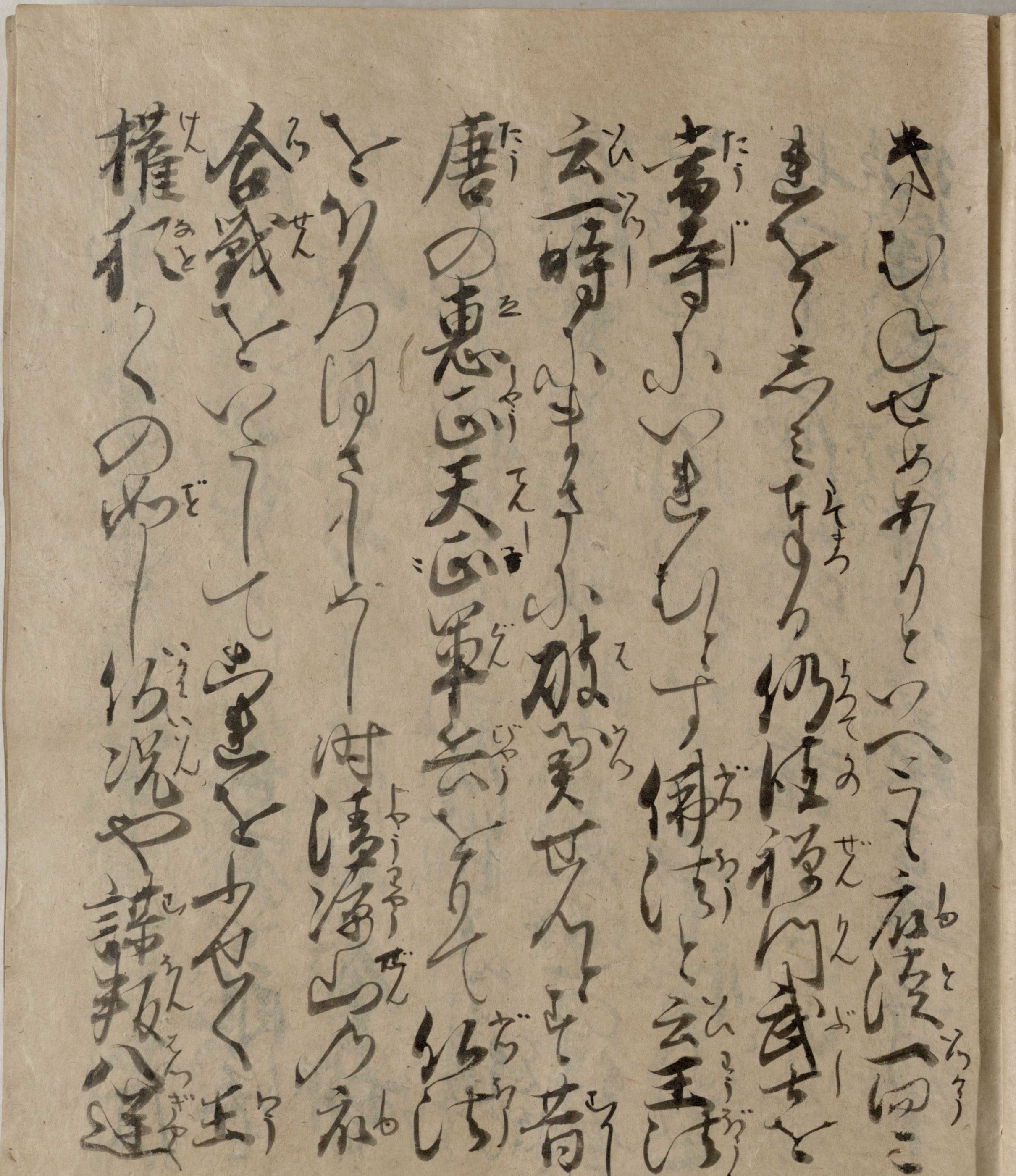
破笠と
と号して
鉄誹
洛
う
ろ
ん
て
又
車
の
力
の
如
く
な
ら
ず
と
な
ん

住山の春也
行脚
年五月十一日大石
多加山門の
高
高
の
如
く
な
ら
ず
と
な
ん

早速の
根







の軍(そう)小(こ)ぜ
剛(こわい)る
ら令(えど)
とそん
の雑事(ぞうじ)
と通(とおる)け、
ねて
物(もの)作(つく)美(よし)
兼(かね)

八日ニ京ヲ立テ
大原ヨリ坂本ヘト趣キ
ソコヨリ三井寺ヘ
園城寺ヨリ関ノ
本道ヲ通リ
ソコヨリ
ソコヨリ
玉泉寺ヲ
モヨウ
ソノ
ソノ
ソノ

教文ゟ初
りて南京ゟ
にらみ
まで
手ぶ細達ゟ魔障
そくきょうりにうだ
障碍風ハ手氏の
ん慶
の事仕ゟ
諸國ゟ
文領の報ゟ
ミろく
ゟ矢竜
あ虎ゟ
ゟ利生
非所ゟ

あきまろ
顕季様大夫
たいふ
織りにて
ゆのゆまで
時都
ときとい
那瑾と
なきん
界の
ふみけ
馬屋の
うまや
度門
たびかど
種と
しゅ
家よの
いえ

元亨十月大上天皇一戒の
て玉泉の眉と授けよ
たてく相國あのりて
給ふる異子武帝と
一武八威
武雀后の
寿祥
そそ陽

ろのそ九州と統領一百
司と進退して奴婢を
一毛分へ王侯と
そへ令
ゆまもれとめしもしれ
耳の男
の淫婦令
生を狂

春つて傳の家領と奪ひとつて舌とまだ相
も行き届かぬ庭園とそつくり相乗
それぞれ権威ぶつて
去年の冬と土用大寒のすきを
迎神博覧会の事務所に詰めきつて今み

たゞ修り行き何程おそへうとも賊有り
ゆき高ひくくして其家を免れ
神ん兵ぺい引つゝき有ひつゝ其へいを給ふこと海うの
ごとし背たう国と私ひそかに
通つうじひそかにひくして軍ぐん
だいに二の親玉多
とゞまりて八幡三ぐう春日
の大明神
新しん国とく
```
```

ケて
新羅(しら)
王(わう)
(そこ)
(そこ)
(そこ

我國南朝
邪勢と
左の陣
なるの
緊賂と
第四年
月廿六日
三井寺
議して

さてさて
六波羅
のてんく
にぎやか
なる
見物
在所
六波羅の
とてゝ
六波羅
ござい
ござる
ござる
ござる

年ふるまゝに大手(おおて)を羅(ら)
とりて
こゝろのまゝに
大軍(たいぐん)を
悪僧(あくそう)
ひとつの
寺(てら)
風(かぜ)
ふせぎ
人数(にんず)
談義(だんぎ)
あより
年(とし)
の
開(ひら)
寺(てら)
人数(にんず)
談義(だんぎ)
の
ひきうけ
年(とし)
家(いえ)
海(うみ)
子(こ)
同(どう)
数(かず)
人

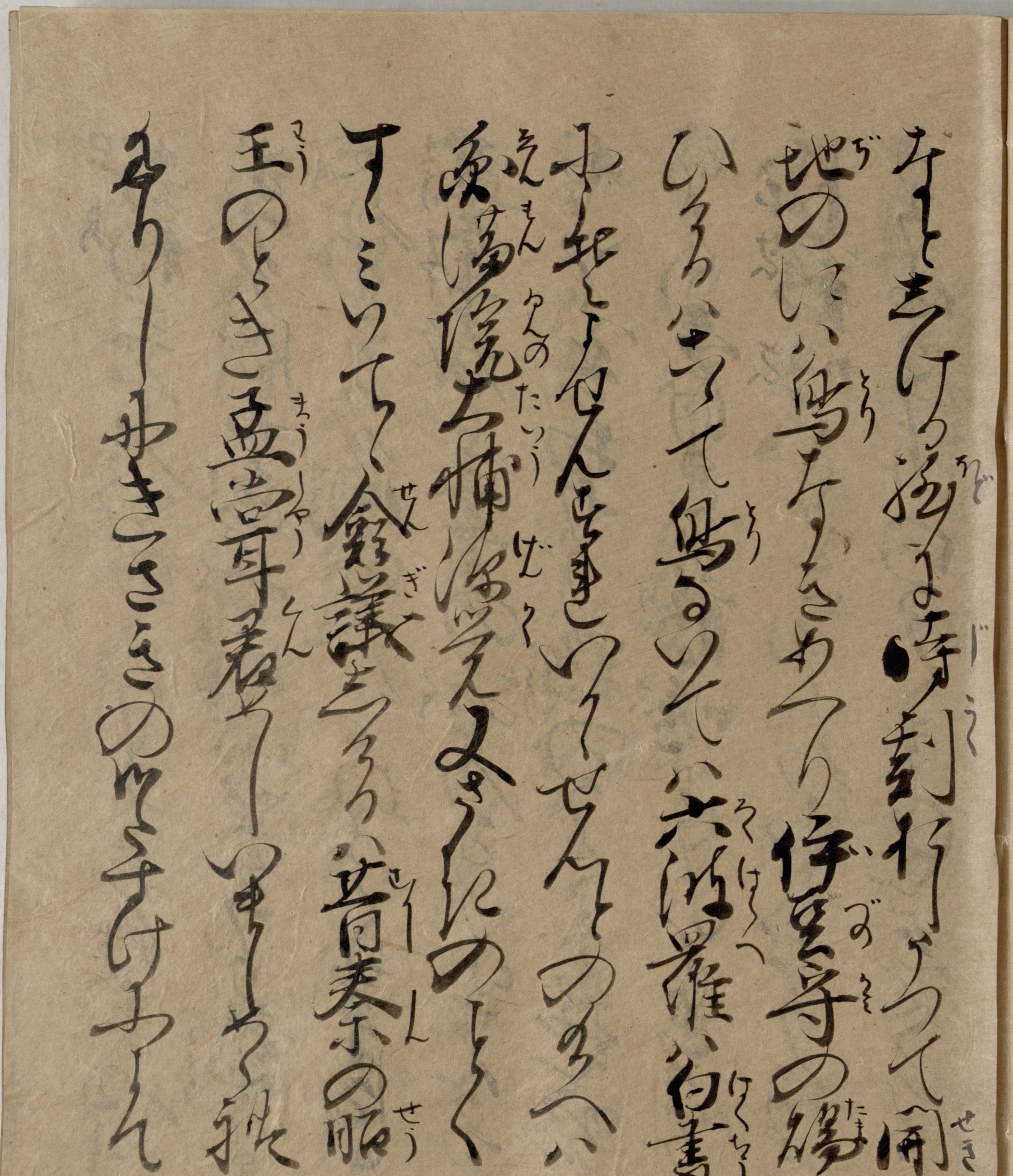
よろこびせし平家の
おごりもいまだやまざるに
後白河法皇の
仰せとて
まづ頼朝の
ゆるされしかば
かの源氏
大軍を
率して
天下
しづめ
よもの
海

白梅の天も
すこしくもり
東文のゆ
せおひしそう
のろひ大和國
かけいそう
まもまぼ

尾張の姫と聞て大なる皇子と
彩雲懸りて仙人降りしと
やうで本文の内容と
かけ違ひたる処多し
よりて今夜会議を
開き諸君の高説を
拝聴せんと欲す

判官殿六条堀川仲成
人を殺し捕らんと仲光大内より
使ひ給はり侍の鬼王鬼次
もろともに参りおりて
神妙の物申平
家開

御書案悪の時
金光院の六天狗
法門房等
幷に舵取
箱根大矢の伝右五郎
院の但馬
うの人六十人の内
毒流御房
午前天狗



この文、秋野小松と書き
漢竹の笛と下り音
かの世と千年宋朝
暫時にして門へ
そもそも
ゆくりなくも
今の
そもそも

野
野

と申すものうち大通(だいつう)の僧(そう)に逢(あ)ふて七日(なのか)加持(かぢ)をして貰(もら)ひ給(たま)ふに其時(そのとき)高(たか)き木(き)の中(なか)に入(い)れ三年寺(さんねんでら)に籠(こも)りて修行(しゅぎょう)をしたれば其(その)木(き)の中(なか)にて三年(さんねん)の間(あひだ)の事(こと)を悉(ことごと)く知(し)りたりと云(いふ)事(こと)を聞(きい)て其(その)僧(そう)に向(むか)ひ我(われ)も其(その)木(き)の中(なか)に入(い)れ給(たま)へと云(いひ)ければ僧(そう)も其(その)心(こころ)を得(え)て其(その)木(き)の中(なか)に入(い)れ

くろのけごろもいでくる
阿闍梨秀圓武蔵三郎有圓
烈牛ものともせざりけり
悪七兵衛景清ざんじやうの
悪源太義平一方の
大将軍と生れ
悪左悪悪
合戦二百八十余箇度
一度も不覚せざりき
そもそも
時を作り
世を取らんと
思ひ給ふ
御方は
いかに

松をいろ〳〵ゆまもりてとう〳〵
後陣(ごぢん)ふせぐまことにひとしく
みまもりて小先陣(せんぢん)二百餘騎(よき)
行(ゆき)まもりてうしろの
をそ方(ふう)のかたちまもりて矢合(やあは)
院の御馬(おんま)ぞろへの者授(さづ)

ふけ夫
うゐ鐘
ひ眞弓
と言度
ゐ打
わ子
錦の眞弓
と詠
五百人

けだかくおもほゆるかも

きりの但馬(たじま)にこえ通(かよ)ひけれ

みやこ住(ずま)ひの浮(う)み明(あ)かしかも

真弓(まゆみ)小屋(こや)の鐘(かね)きこえ

の湯(ゆ)と共(とも)に五枚(ごまい)甲(よろひ)

さゝら波(なみ)うつ方(かた)ながめ

さゝらの弓(ゆみ)矢(や)おひ

さゝら武者(むしや)このむ白(しろ)和(わ)の

さゝら毛(げ)刀(かたな)

大ぜんじゃ
ろうそくをあけてみると
足のうら三寸ほどの
おのろくろくろ
ふとさ
七つの
頭
ながさ
廿七八間
さだ
さてさてふしぎなことよ
ふしぎなことよ

うみのくに
上野國
ちょうにんしんでんいりょうのこと
町人新田入用之事
すぎ
杉
かわら
の河原
ちょうぶ
と秩父
きそ
木曽
ゆみや
弓矢
きぼ
の疵
うまぐち
馬口
しまうま
縞馬
どうや
東屋
うまのかみ
馬之上

とうどう
高ふく大宮
たろう　そうだ
里の宗太郎
き　あ
野うさぎ
もみて行
ま
うろ馬
あ
辺のそま
東もよ
よねろう
ゆき

こそりのゆき
まぎ
まよ耳々
そくそくして連銭あげ毛
ぬくぬくとして黄もち馬よ和
そらそらしくうちふりそろへ
だいそんじ大事の
とと
くろくろとして高殿
てきまそ
又敵おひ
ひで
ちかよる
ふりそろへ
だい
代々の
あぶみ
鐙
くだ
砕
ひで
秀
ふりそろへ
ふりそろへ

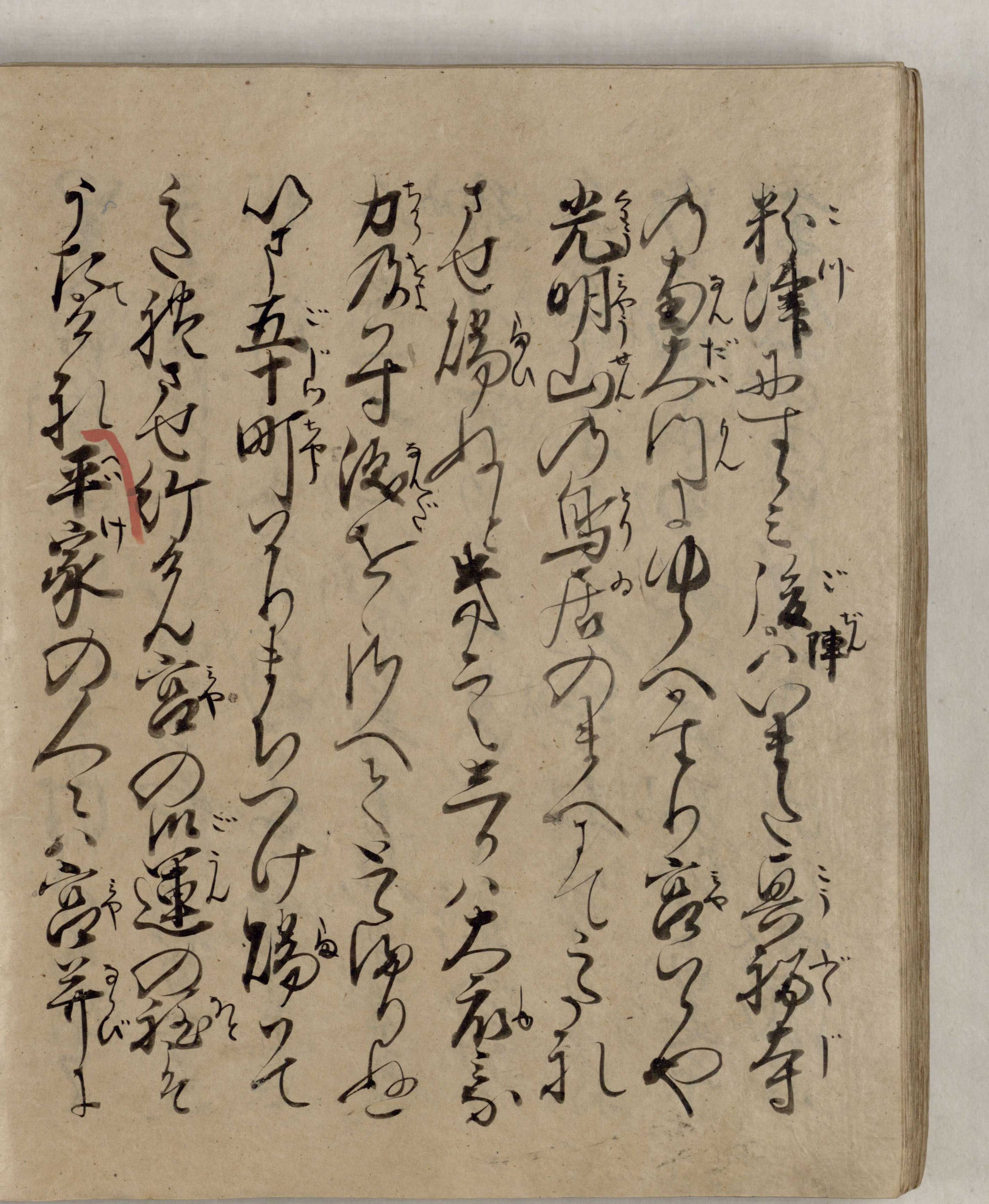
たゞる　ゝゞかゞ
忠濃生七盛う楊よ
地乃京ゝゝ
矢と打ゝ
すゝ
平家乃
三位入道
ん
平乃院

小りょ
来てくれ
矢も鉄砲
ら上げ
こそう物
源重実
こまで来
童とて

あるもの
十文駄
小鳥
ふくろ
までも
見て自宅
の為に
うるけ
ゑんどの
小仲先
て
家の
平等寺
の
殿
とう
清親
六条
仲
手

ざ
もとより
この中(なか)
う婦(よめ)子(こ)
の奏(だいやう)子(こ)
日来(ひごろ)
もろ〳〵
もと唱(とな)
多(た)
くの
小前(こまへ)
不(ふ)
像(ぞう)
三役(さんやく)
つぶ
ころ〳〵
ぜん
しん
生義(せうぎ)
に
ら
な
く
ん
に
ら
ら
ら

一すすてもとぶ氷の底とそろひ
あわりとそろふ大吉の
君遠ふまもる事うしろまし
三年まで家を出ぬ平の
家いよ高く鄙ひやの
世をそとぼす



三位入道の
五百餘人の
強力ども
長刀
なぎなぎ
三井寺の
法師原へ
ちらく
かけちらし
切ちらす
事
おびたゞしかりけり
よ源三位入道の
孫
宇治川の
うへ
これ
又
かくの
ごとく
強

守國教の
如き七歳の
女子高名の
事なども

あり宇治殿二条殿
関白と小一年八十と
そうそう神のもらよもあ
の朝まとやうりあり
聖徳太子の崇峻天皇と横死
朝もまた此ひとりしう
子の長じ
きうそくの
朝

北面の武士

仁のまします東宮（とうぐう）

河内（かわち）の国（くに）八尺（やさか）と云（いう）

もの、

ありて三年（てんねん）

白河院（しらかわのいん）

御所（ごしょ）

警固（けいご）

せんがために

召（めし）

置（おか）れ

ける

が

王子（おうじ）

の

御子（おこ）

源氏（げんじ）

の

姫君（ひめぎみ）

と

申（もう）

奉（たてまつ）

る

を

御覧（ごらん）

じ

て

北面の武士

仁親（ひとちか）

叙(ぢょ)して中(なか)ばより
仏(ぶつ)を信(しん)じ世(せ)の諸(もろ)の
事(こと)を棄(すて)て三宝(さんぼう)に帰(き)
す。子湯(やの)の大臣(おとど)宣(のたまは)く
「汝(なれ)の如(ごと)く花(はな)
園(その)の外(ほか)なれ
ば仏(ほとけ)の法(のり)を
有仁(ゆうじん)公(こう)の
教(おしえ)の如(ごと)く
訶(てう)伏(ぶく)のほか
更(さら)に
高倉(たかくら)
の宮(みや)
謀(む)
逆(げき)
動(どう)
揺(よう)
し
て
晩(おそ)
く
成(な)
れ
と
い
へ
ど
も

とすてふ事は元日恩
賜の御衣を大内(だいだい)の御(ご)
きこしめす事殿(でん)とその
年とを始めて拝(おが)
したてまつれる
歌一首(ひとつ)
あらたまの年の始(はじめ)に
かくしつつ
人も大宮(おほみや)
かくしこそ
あらたまの月と

一朝の高名も木の下露の
もろきもあり
有験の高僧貴僧も
法の秋
その主上
仁平
三階の

の方（かた）へ馬車（ばしゃ）を廻（まわ）して
御殿（ごてん）の
いへさうもあらず
ろうせん公議（こうぎ）
こちらも
場（ば）へ
主上（しゅじょう）
毛頭（もうとう）
軍義（ぐんぎ）家（か）

いろは小鳥の刻限よりも
鳴弦をうち三度の高名
よ前陸奥守源義家そのころ
宇そ氏ら反乱
時毛よろ兵
しまりそく
先例
武士
源平

さ
二ともしきて
南殿(なでん)の大床(おゆか)に
とまりて
雅楽(ぐがく)のきや
音時(ねとき)ハ
まもらん
まもる
仁寿殿(じじうでん)
化(げ)の物(もの)
いやまさる
化の物

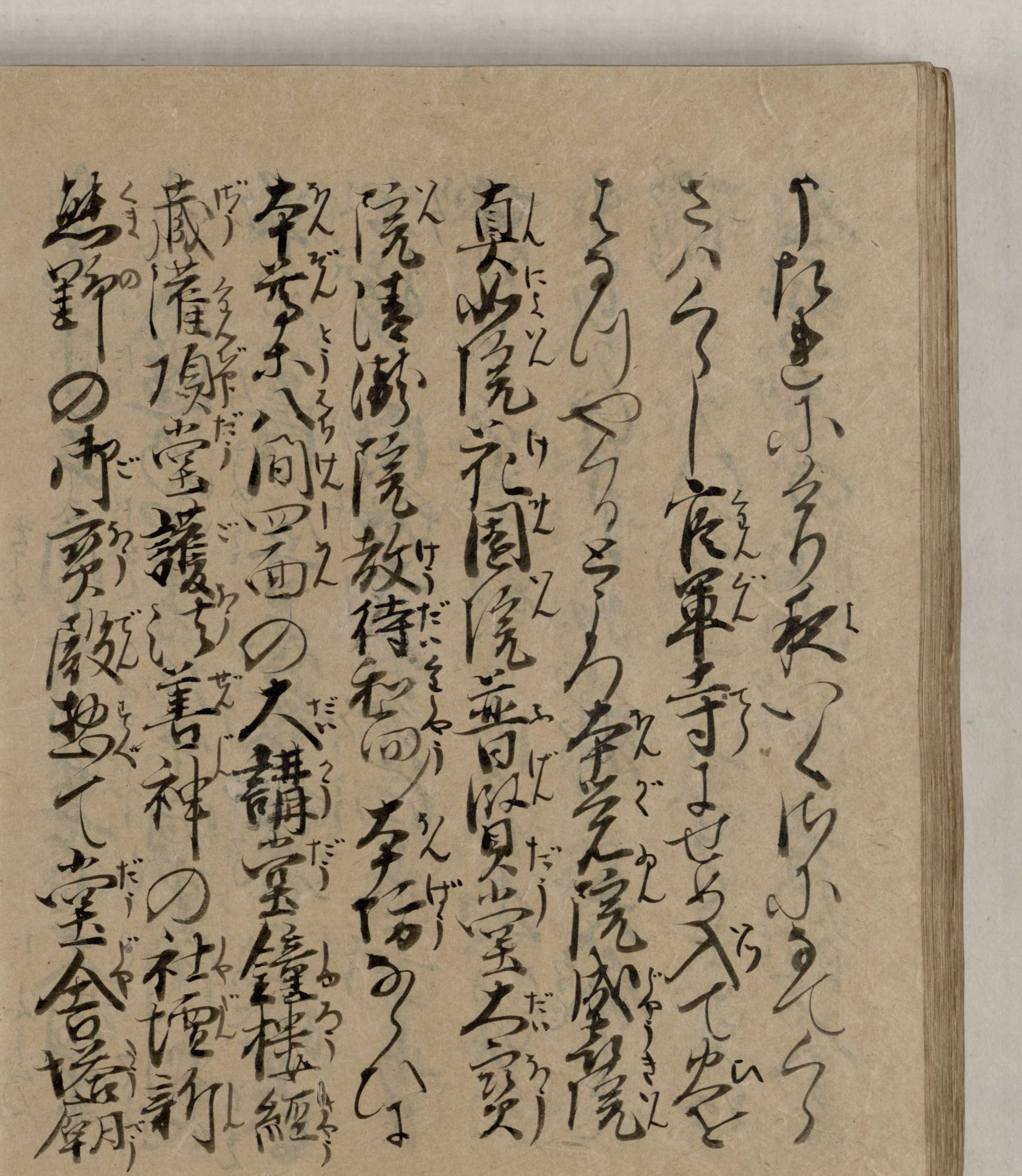
二ノ矢ヤ雅楽の舞人の
小ふろ冬東三条殿
一ひとつ物の数珠

物もふ春
そらのうら
安八磐大(やすはちまえだい)
彩今(さいきん)
まてどへ
まそほ
まそほ井(ゐ)の
そもと

左大臣殿の
よるなんと
なりわたりつき
月十日あまり
ま部ぎすの
うちなきて
ゆきかへる
声も
ふるさと
恋しう
おぼえ
侍
ざぜんの
ころ
場
ばん
つとめて
まいり
たるに
殿
でん
の
御
ぎょ
前
ぜん
に
人
ひと
の
多
おお
く
候
こう
し
時
とき
鳥
ほととぎす
の
声
こえ
を
聞
きく
と
いふ
題
だい
を
賜
たまわ
りて
人
ひと
々
びと
歌
うた
よみ
侍
はべ
る
に
なか
なか
に
聞
きく
ほど
も
なく
て
明
あけ
ぬ
る
心
こころ
地
ち
を
よみ
侍
はべ
り
ける
ほと
ぎす
なく
なく
さと
を
こえ
ぬ
れば
ほの
ぼの
と
のみ
聞
きく
ぞ
あか
ぬ
殿
でん
ばん

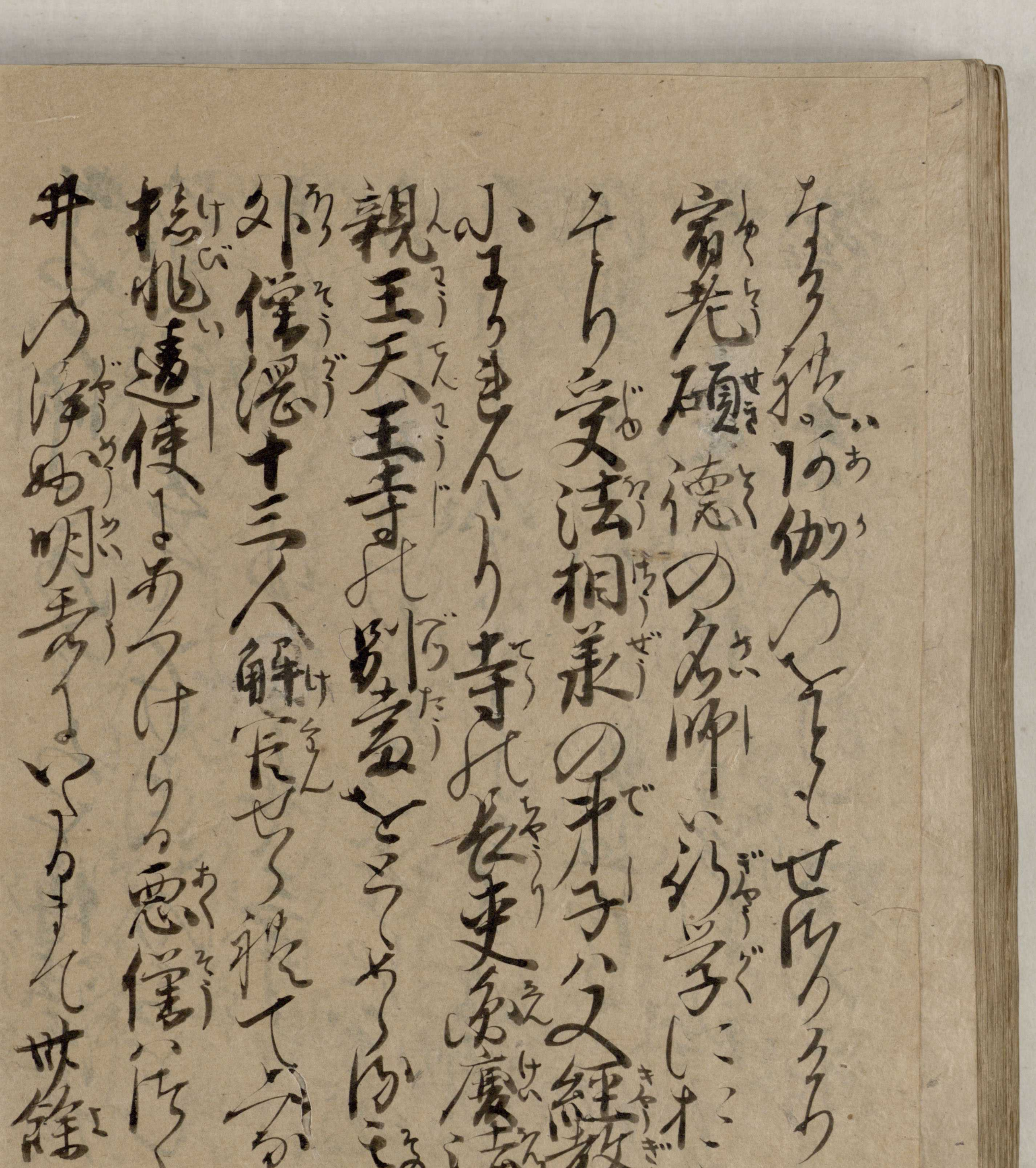
五月雨の空も名のみの
山郭公(ほととぎす)
なほ待(まち)ながらまどろめば
たちわかれ
とく行(ゆき)過(すぎ)ぬる
ほととぎす
そのうら後(のち)の
手紙(てがみ)には
四国(しこく)路(ぢ)の
領(りょう)分(ぶん)
我(わが)
庄屋(しょうや)
名(な)
なにがし
なる
人(ひと)の
許(もと)へ
文(ふみ)
遣(つかわ)しける
返事(へんじ)
ありて
曰(いわく)
扨(さて)
其(その)
後(のち)は
御(ご)
無沙汰(ぶさた)
打過(うちすぎ)
申(もうし)
候(そうろう)
扨(さて)
又(また)
此(この)
度(たび)
御(ご)
用(よう)
筋(すじ)
ありて
飛脚(ひきゃく)
を
以(もって)
申(もうし)
遣(つかわ)
候(そうろう)
処(ところ)
御(ご)
留守(るす)
の
由(よし)
承(うけたまわ)
候(そうろう)
間(あいだ)
其(その)
儘(まま)
帰(かえ)
り

うつて元和五月廿七日に
みやこを立(たつ)
軍(ぐん)ぜい廿萬(まん)
多勢(おほぜい)にて国(くに)
切(きり)りうつて
まもりけれ
大(おほ)ぜい
つゐに
大(おほ)ぜい
ころされ
大(おほ)ぜい
の
侍(さむらい)
衆(しゅ)
ども
(つづき)
守(もり)忠(ただ)殺(ころ)され
寺(てら)へ
逃(にげ)
入(いり)
男(おとこ)
将軍(しょうぐん)
御前(ごぜん)
へ
御(ご)
注進(ちうしん)
申(もう)
上(あげ)
候(そうろう)
ば
将軍(しょうぐん)
大(おほ)
いかり
給(たまい)
ひ
其(その)
ま
ゝ
御(ご)
馬(うま)
に
召(めし)
され
御(ご)
出(いで)
なさる
ゝ
を
聞(きい)
て
大(おほ)
坂(さか)
の
城(しろ)
主(ぬし)
秀(ひで)
頼(より)
公(こう)
の
御(ご)
母(はゝ)
様(さま)
淀(よど)
殿(どの)
三(さん)
百(びゃく)
余(よ)
人(にん)
を
引(ひき)
連(つれ)
て
逃(にげ)
給(たまい)
ける
を
追(おつ)
かけ
て
討(うち)
とる
と
雖(いえど)
も
大(おほ)
将(しょう)
軍(ぐん)
の
御(ご)
命(めい)
に
て
刑(おしおき)
よ
矢(や)
倉(くら)
へ
入(いれ)
置(おき)
給(たまい)
ける
を
聞(きい)
て
淀(よど)
殿(どの)
を
初(はじめ)
と
して
皆(みな)
〳〵
自害(じがい)
なさ
れ
ける
と
ぞ
聞(きこ)
へ
ける



六百三十七字大津の在家一千百
五十三字づゝ切経七千余巻一切智論のまゝ
なるもの六百余巻仏像二千余体一
切の物ども悉く焼けぬ神護慶雲四年
四月のころ始めて此の事を聞き
なげきかなしむ事限りなし
然れども義大納言の私の

天王寺
年俸
と主
待兎
附家
寒殿
下生
きて



人の事(こと)
國土(こくど)乃(の)さうたい
更(さら)に以(もつ)て平家(へいけ)の世(よ)の事(こと)
なり。然(せん)ば先(まづ)表(おもて)やらんうら
人の

8N-3
"N3"
He51
4

11687

国立国語研究所
1001152873